

每週月曜日発行

<https://www.zck.or.jp/>



環境の激変に地域はどのように
対応すべきか

明らかになった。ただし、問題が深刻化している背景には、我々の暮らしや経済活動の在り方自体が起因しているために、その対策は、社会・経済面でも一体的に取り組むべきものであり、その取組結果は、当然今後の我々の暮らしや経済を大きく左右する。

だからこそ、それらの対策は市民や事業者に無理な我慢や不利益を強いるものであってはならないし、暮らしや経済活動を環境共生型に変え、その変化を通じ、高い生活の質を実現するという、全関係者のメリットの享受を目標に掲げながら進めていく必要がある。

国連事務局長のアントニオ・グテレスが「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰の時代が来た」と警告したのは2年前の、2023年であった。環境変化の影響を受けやすい一次産業を多く有する町村ほど、迫りくる危機を強く感じておられるはずである。そのような地域こそ、本気の気候変動対策を展開し地域創生につなげていただければ、と今、東京都のある自治体の環境基本計画の策定支援をしながら、強く思っている。

「日本一のそば畑」とも呼ばれ、栽培に適した土地で良質のそばが生産される下郷町・猿楽台地。面積約23haの畑は、見渡す限り小さな白い花に包まれる。昼間は緑と白のコントラストが美しく、夜には満天の星空が頭上を覆う。毎年多くの観光客やカメラマンを魅了する景色が広がる。

地方六団体

岩田副会長・会長代行と井上財政委員長が『いわゆる「ガソリンの暫定税率」廃止に関する緊急提言』について要請活動

岩田副会長・会長代行（千葉県東庄町長）をはじめとする地方六団体等の代表者は9月3日に、立憲民主党、日本維新の会、日本共産党に対し、『いわゆる「ガソリンの暫定税率」廃止に関する緊急提言』について要請活動を行った。また、井上財政委員長（埼玉県毛呂山町長）をはじめとする地方六団体等の代表者は9月4日に、国民民主党に対し、3日と同様に要請活動を行った。

緊急提言では、いわゆる「ガソリンの暫定税率」の廃止について、地方への影響等を十分に考慮し、地方の税収に対しては代替となる恒久財源を措置するなど、安定的な財源を確保することを前提に、責任ある議論を丁寧に進めるよう求めている。

※緊急提言は、全国町村会ウェブサイト（<https://www.zck.or.jp/>）を閲覧ください。

■日本維新の会



▲斎藤政務調査会長（中央）に要請する岩田副会長・会長代行（左から2人目）

■立憲民主党



▲重徳政務調査会長（中央）に要請する岩田副会長・会長代行（右端）

■国民民主党



▲浜口政務調査会長（左から3人目）に要請する井上財政委員長（右から2人目）

■日本共産党



▲辰巳衆議院国会対策副委員長（中央）と山添政策委員長（左から3人目）に要請する岩田副会長・会長代行（右から2人目）

フォーラム



▲横倉山と仁淀川

高知県
お ち ち ょう
越 知 町アウトドアなまちにするぜよ！
宣言した越知町の取組

1. 越知町の概要

越知町は、高知市の西方約32kmにあり、高知県のほぼ中央、仁淀川の中流域に位置し、地域特性は山間から中山間地域へ移行する地域である。町域は東西15・2km、南北16・6kmで、西南から東北にかけて長く伸びた形をしており、総面積は111・95km²の広さを有している。

地形は、町域の大部分を占める山地と中央東部に位置する越知盆地よりなっており、仁淀川町との境界にある1,073mの禿山を頂点にして、800～1,000m級の山岳で構成される西部山地から東部へ向けて全体に傾斜している。

河川は、町域全体の西部から東部への傾斜に沿って、町域中央部を仁淀川

が流下しており、市街地付近で仁淀川が大きく湾曲する部分で柳瀬川、坂折川が合流している。この合流部分で本町唯一の盆地が形成されている。

地質は、西南日本外帯の秩父累帯に位置し、横倉山周辺は実に4億年以上前の日本でも古い部類の地層である。本町は、明治11年、越知村として誕生し、明治33年、町制を敷き、以来高吾北地域の主要地、予土線交流の要衝として発展している。

2. アウトドアなまちにするぜよ！宣言について

町長就任2期目のスタートにおいて、平成30年6月議会での所信表明の中で、公約として「アウトドアなまち」を掲げた。本町は横倉山や仁淀川などの豊かな自然が多くあり、その資源を活用するための環境整備を推進し、多





アウトドアなまちに するぜよ!宣言

宣言内容

「自然回帰」ももとの人間の暮らしは自然との共存であったが、いつしか次第にそこを脱し、都市的な生活を築いてきた結果、その過程で自然や歴史的資源、文化などの古き良きものが失われてきた。

それらを取り戻すべく、自然に近い生活を再び求めようとするのが「自然回帰」ではないか。対極に向かった過程・経験・歴史があるからこそ「回帰」がある。

そこで越知町は、今なお、残る山・川・里などの豊かな自然を活かした環境整備を推進し、多世代で自然に触れ「遊び」「学び」「楽しみ」を通して、人間が持ち合わせている「五感」「感性」などの「本来の人間力」を取り戻しながら「心豊かな生活」を営むことができる、『アウトドアなまち』を目指すことを宣言する。

平成30年10月27日

△ 高知県越知町

▲アウトドアなまちにするぜよ!宣言

世代で自然に触れ「遊び」「学び」「楽しみ」を通して、人間が持ち合わせている「五感」「感性」等の「本来の人間力」を取り戻しながら「心豊かな生活」を営むことができる、『アウトドアなまち』をめざしたいと考えていたからである。

そのため、宮の前公園をはじめ多数のキャンプ場の整備、仁淀川を活かしたカヌーやラフティング事業の充実、横倉山でのトレッキング事業のブラッシュアップ、まち歩きに必要なまち小屋の整備を行ってきた。

今後は農業体験や漁業体験の活性化、植林の広葉樹化、野外での防災教室などを進めていきたい。

3. スノーピークとの共同事業

第5次越知町総合振興計画に定められた施策の大綱の一つである「地域資源を活かした産業の振興」を推進するため、情報発信機能と物販機能を持った「観光物産館おち駅」を拠点に、本町における観光振興と物販体制の強化を図ってきた。また地域のさまざまな素材を組み合わせた交流・体験型観光のメニューづくりや地場産品などを活用した新商品開発に取り組み、観光および物販による外貨の獲得につなげてきた。観光協会の事業であるカヌーやラフティングは「仁淀ブルー」効果もあり、知名度はあがっていた。しかし

ながら、本町は宿泊施設が少なく、滞在型観光の分野では弱みが多いことから、本町の自然の魅力である山（横倉山）と川（仁淀川）での体験型観光と合わせて滞在施設を整備することで、観光客の満足度を上げる必要があると考えていた。

この基本計画を策定するために、平成27年11月、全国的なブランド力のある株式会社スノーピークに監修を委託することになった。

その後、平成30年4月に、「スノーピークおち仁淀川キャンプフィールド」をオープン。スノーピークのキャンプ場としては四国初であり、仁淀川に面したキャンプ場には、本町ゆかり



▲スノーピークかわの駅おち

フォーラム



▲ラフティング



▲スノーピークおち仁淀川キャンプフィールド



▲住箱

の木々が程よく木漏れ陽を作る美しい芝生のオートキャンプサイト30区画と、隈研吾氏デザインのモバイルハウスの「住箱」を10棟設置した宿泊棟を展開している。また、仁淀川を感じるアクティビティとしてラフティング事業をスタートした。

さらに令和元年6月には、コスモスマつりなどで親しまれる宮の前公園に「スノーピークかわの駅おち」をオープン。地域の物産品を中心とした販売、そしてビジネスや観光、旅を含めた来訪者へ向けた宿泊拠点として、こちらでも「住箱」を展開し「スノーピークおち仁淀川キャンプフィールド」と2拠点にて、本町の豊かな自然

や景観、そして野遊びの魅力を発信している。

今後とも全国から人が呼べる満足度の高い観光地づくりを推進することを通じて、経済波及効果や雇用拡大、地元との交流、リピーターによる交流人口の拡大等、地域活性化につなげていく。

4. 仁淀ブルーについて

高知県のほぼ中心を流れる仁淀川は、西日本最高峰の石鎚山に源を発し、124kmにわたって土佐湾に流れ着く、四国3大河川の一つであり、国土交通省が発表する「水質が最も良好な河川」に、令和7年時点、9回選ばれている。

リゾート地の海辺を思わせるような透明度、エメラルドグリーンともターコイズブルーとも呼べるような青の美しさをネイチャーカメラマンの高橋宣之氏が「仁淀ブルー」と呼び始め、その名が知られていったと言われている。

なぜ青く見えるのか？さまざまな説があり、これは、水中の不純物が少なく、青い光を強く反射するためである。また、仁淀川は、流れが速く、水温が低いいため、不純物が少ない状態を保ちやすいのが特徴でもあり、川底の岩石が青みがかった「緑色片岩」であることも、青い色をより鮮やかに見せる要因の一つである。



▲仁淀ブルー

「仁淀ブルー」とは特定の場所のことを指しておらず、この川のきれいさを表現した仁淀川のキャッチコピーのようなものである。

仁淀川の魅力は、透明度の高さだけではなく、カヌーやラフティング、アユ釣り、バーベキューなど、アウトドアライフを楽しめるスポットが数多くある。

また、川の要所には、増水の際に水に沈む欄干のない沈下橋が数多くあり、高知を代表する風景となっている。本町には、仁淀川本流に3カ所ある。その一つの沈下橋が、浅尾沈下橋であり、「仁淀ブルー」の名付け親である高橋宣之氏は、「仁淀川流域における



▲浅尾沈下橋



▲仁淀ブルー

本町における人口は、4,744人（令和7年7月1日時点）。うち34歳以下の人口は、平成22年の1,414人から令和5年の間で530人減少している。また、20歳から34歳の人口が令和元年から令和5年の間で毎年28人程度（平均）が減少している。主な要因

5. 人口減少対策について

絶景ポイント」として、原始の森横倉山とともに、日本の原風景の残るここ浅尾沈下橋のある鎌井田地区を挙げている。この浅尾沈下橋は、映画のロケ地にも使われていて、「竜とそばかすの姫」の舞台にもなっており、現在でもたくさんの方が聖地巡礼に訪れる場所となっている。



▲浅尾沈下橋とラフティング

二つ目は、住宅リフォーム支援事業である。建て替えの難しい空き家や住宅のリフォームを促進し、既存住宅の

後、新生活を始めるにあたり必要となる費用の軽減を図るための応援金を支給し、町外からの転入促進および町外への転出防止を図っていく。

一つ目は、住宅取得支援事業である。これは、町内外の子育て世帯または若者夫婦世帯が、中古住宅を売却し、その土地に新築住宅を建設する場合に奨励金を支給。あわせて新築住宅建設後、新生活を始めるにあたり必要となる費用の軽減を図るための応援金を支給し、町外からの転入促進および町外への転出防止を図っていく。

としては、進学や就職などを契機に町外へと転出する若者が多いことが挙げられる。婚姻件数は、平成22年には23組であったが、令和5年では11組と12組減少している。出生件数は、平成22年の38人から令和5年には16人と22人減少している。なお、合計特殊出生率については、1.09となっている。

移住数の実績は、増加傾向（令和元年24人→令和5年35人）にあり、令和5年に寄せられた移住相談のうち、およそ8割が住まいに関する相談であった。空き家バンク延べ登録数は、令和元年は63件から令和6年は96件と増加したが、現在、入居可能物件は7件と少ない。

本町の人口減少対策は、平成23年度に越知町総合振興計画で定めており、また、令和7年度からは、高知県の人口減少対策総合交付金を活用して、新たな取組を開始した。

6. まとめ

本町は、「アウトドアなまち」を宣

ほかに若年層交流イベント支援事業として、若者が町内で開催する同窓会を支援することで、同世代の若者の交流を推進するとともに、若者に対して、町の移住支援策等各種施策を紹介することにより、「出会い」の場の創出に加えて、「Uターン」「定住促進」につなげる。また、結婚意欲のある男女を対象に婚活イベントを開催することにより、多くの出会いの場を提供し、婚姻数の増加につなげていく。

子育て・若者世帯の
マイホーム取得を支援します！

最大
196万円

新築住宅 100万円
+
古い家の取り壊し 75万円
+
新生活応援金 21万円

住宅リフォーム 50万円

▲人口減少対策（子育て・若者世帯のマイホーム取得を支援します！）

フォーラム

【町村長としての当選回数】4回
 【町村長に就任するまでの経歴】
 ▽昭和52年4月1日〜平成17年11月6日旧大河内町職員▽平成17年11月7日〜21年10月27日神河町職員▽平成21年11月27日神河町長
 【町村会関係の経歴】▽平成21年11月27日〜令和3年7月26日兵庫県町村会理事▽令和3年7月26日〜4年7月25日兵庫県町村会監事▽令和4



兵庫県町村会では令和7年8月21日の定期総会で次の通り会長を選出した。
 （10月1日就任）
 兵庫県町村会長
 神崎郡神河町長
 やまな 宗悟
 昭和34年1月20日生

新任都道府県町村会長の略歴

言することともに、まちづくりの基本理念である、①自然を活かして「遊び」「学び」「喜び」を創造する②自然を通して「生き抜く力」「いたわる心」を育てる③自然の中で「自然との交流」「多世代間交流」を深めると設定し、本町

らしい自然と触れ合い、人間力を高め、互いに助け合いながらまちづくりを進めていく。
 また、人口減少対策については、子育て世帯が魅力を感じる町になること、都市部の人々から移住先として選

んでもらえるように、都会にない自然の豊かさや人との絆の強さといった本町の強みを最大限に活かし、あらゆる世代が暮らしやすい、住みやすい、住んでみたい越知町をめざしていく。

高知県越知町長 小田 保行

【町村長としての当選回数】4回
 【町村長に就任するまでの経歴】

▽平成21年12月東邦テナックス（株）（旧東邦レーヨン）（株）退社▽平成7年4月北島町議会議員（3期連続当選後退任）▽平成22年1月北島町長就任（現在4期目）

【町村会関係の経歴】▽平成29年8月21日〜令和元年8月20日徳島県町村会副会長

【家族】妻、長女、長男、母
 徳島県町村会では令和7年8月20日の定例会議で次の通り会長を選出した。

（8月21日就任）

徳島県町村会長
 板野郡北島町長

ふるかわ 保博
 昭和24年3月3日生



【主な業績】▽防災行政無線デジタル化による円滑な情報伝達▽鳴門市との共同浄水場整備▽公共下水道事業の管渠整備の拡充▽ポンプ場の整備や増設による内水対策▽認知症高齢者等SOSネットワーク事業の開始▽認可保育園の誘致整備による待機児童の緩和▽在宅児童の幼稚園2年保育実施▽企業誘致促進▽町で初めてネーミングライツの契約を締結

【趣味】ゴルフ
 【家族】妻

客室のご案内

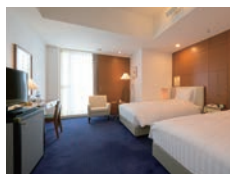
SINGLE ROOM
シングル
119室



DOUBLE ROOM
ダブル
12室



TWIN ROOM
ツイン
18室



和室もございますのでお問い合わせください。

※市町村職員共済組合等の宿泊施設利用助成券がご利用いただけます。

ご予約・お問い合わせ



全国町村会館

TEL.03(3581)0471

〒100-0014 東京都千代田区永田町1丁目11番35号
 ホームページアドレス <https://www.zck.or.jp/kaikan/>



●全国町村会館へのアクセス

- ・有楽町線・半蔵門線・南北線「永田町駅」3番出口徒歩1分
- ・丸の内線・銀座線「赤坂見附駅」徒歩8分
- ・タクシー東京駅から約7分



日本も元気にする JICA海外協力隊

JICA海外協力隊は途上国の課題を解決し地域の人々を元気にしてきました。世界を元気にしてきた協力隊経験者は日本の町村も元気にします。本誌では、これまで10回掲載。今回は第3弾企画として群馬県甘楽郡南牧村を元気にするJICA海外協力隊経験者を紹介します。

ウガンダと繋がる、南牧村の喫茶店

東アフリカに位置するウガンダ共和国（以下、ウガンダ）は、「アフリカの真珠」と称されるほど、豊かな自然に恵まれた国だ。そんな豊かな自然に育まれて、アフリカでも有数のコーヒー生産量を誇り、所得水準が低い同国において貴重な輸出作物となっている。日本ではまだまだ認知度の低いウガンダ産コーヒーだが、群馬県甘楽郡南牧村に、ウガンダのコーヒーが楽しめる喫茶店「村の喫茶店もくもく」がある。

南牧村にそよぐウガンダの薫り

このお店を営んでいるのは、鰐渕元貴さんと侑生さんご夫妻。夫の元貴さんは、JICA海外協力隊（以下、JOCV）として2015年から2年間ウガンダで活動した経験を持ち、帰国後の2019年に地域おこし協力隊（以下、協力隊）として、妻の侑生さんと一緒に南牧村へ移住してきた。「生業作り」をミッションとして掲げる協力隊の活動の中で、村の施設を活用した喫茶店営業に取り組むことになり、縁のあるウガンダ産コーヒーを取り扱うことになった。ウガンダのコーヒーは、スッキリとした味わいで飲みやすく、お客さん

として訪れる地元の高齢の方たちにも好評だという。さらに、南牧村の特産品である「炭」で自家焙煎して作ったウガンダのドリップバッグコーヒーは、お店だけでなく南牧村の道の駅でも販売されており、村を訪れた人のお土産としても重宝されているようだ。また、お店ではJOCV時代の繋がりを活かして、ウガンダの女性たちが手作りのクラフト製品の販売も行っており、その売り上げは現金収入の少ないウガンダ農村部の女性たちの貴重な収入源のひとつとなっている。

地域おこし協力隊として南牧村へ

鰐渕さんが南牧村へやって来たのは、ウガンダでのJOCV経験が大きく関わっている。「こともがすく多いウガンダの村で二年間生活をしたことで、日本の少子高齢化がすぐリアルな社会問題として感じられるようになりました。そんな折に、高齢化率日本一の自治体である南牧村の協力隊の募集を見つけて、ここなら自分たちのやりたいことを追求しながら、同時に地域社会に対して、良いインパクトを与えられるのではないかと思いました。面接の際に、初めて実際に南牧村を訪れたのですが、すごく元気で心の温かいお年寄



【JOCV 経験者】鰐渕元貴（写真左）
隊次：2015年度1次隊（2015年6月～2017年6月）
職種：食用作物・稲作栽培
配属先：国立半乾燥資源研究所

りの方が多いところだなという印象を受けました。また、村長さんをはじめ、外からやってくる若者を応援してくれる気風を肌で感じることもできたので、この村で挑戦してみよう」と、当時の心境を振り返ってくれた。

地域とともに成長する協力隊

人口減少と少子高齢化が進む南牧村では、鰐渕さんのような若い世代の移住者を歓迎している。長年、南牧村で協力隊の受け入れに関わってきた長谷川最定村長は、協力隊の役割を、単なる村の従業員ではなく、地域とともに成長するパートナーと捉えている。「大切なのは、自分で考えて行動すること。そうやって、村

情 報



カラオケ大会の様子。お店ではこの他にも様々なイベントが実施されている。



お店で販売しているクラフト製品は、全てウガンダの女性たちの手作り。

とともに成長してもらいたい。」こうした思いで、鰐淵さんをはじめ外部からの移住者を積極的「に受け入れ、協力隊卒業後にも村で生活を続けていけるよう、しっかりとしたサポート体制を整えている。こうした手厚い行政のバックアップがあり、鰐淵さんは2022年に地域おこし協力

ウガンダの経験を 南牧村で活かす

隊を卒業した後も、独立して「村の喫茶店もくもく」の運営を続けている。

「村の喫茶店もくもく」は、毎週土曜日から月曜日は通常の喫茶店として営業を行い、それ以外の日は、地域の集まりや趣味の教室など、予約制で幅広い用途に利用できるようになっている。2019年に運営を開始した当初は、月に数組が利用する程度であったが、現在ではいきいきサロンやストレッチ教室など数多くの集まりに利用されており、予約の入っていない日がほとんどないそう。また、それとは別にカラオケ大会や映画上映会などのイベントも定期的に開催されており、村内外から様々な世代の人たちが集まり、交流する絶好の機会となっている。これは、鰐淵さん夫妻が村で生活をしながら少しずつ地域に輪を広げるなかで、一つずつ積み重なって今に至ったものであるが、この「地域に輪を広げる力」こそ、鰐淵さんがJOCVとしてウガンダで学んだ最も大切なスキルの一つであったと言う。「ウガンダで私が暮らしていたのは、首都から10時間以上離れた田舎の村だったので、外国人は私一人だけ

くのに、地域の人たちと関係を構築することは必要不可欠でした。幸い私も周りのウガンダ人も英語が話せたので、「コミュニケーションを取る」と自体は難しくなかったのですが、どうやって信頼関係を築いていくかというところに苦労しました。今考えると、そこで試行錯誤をして、たくさんのウガンダの人たちと関わった経験が、南牧村での今の仕事や、地域の人たちとの関係づくりに役立っていると思います。」

南牧村での今後の挑戦

鰐淵さんは、学生時代から国際協力と農業に興味を持ち、大学は農学部で学んでいたことから、ウガンダでは地域に適した稲作の研究や、近隣地域の農家へ稲作の普及活動を行っていた。現在も南牧村で、お店の営業の傍ら、近くに借りた畑で大麦や落花生など数種類の作物を栽培しており、その内のいくつかは妻の侑生さんが加工をして商品化し、店頭やオンラインショップで販売している。また、南牧村の学校と協働した英語教育や国際交流の活動にも取り組んでおり、2025年3月には、ウガンダの小学校と南牧村の義務教育学校「なんもく学園」を繋いだオンライン交流授業も実施した。このように鰐淵さんの活動は、喫茶店の営業

から畑での作物栽培、教育活動に至るまで多岐にわたっているが、それらの取組を上手く組み合わせながら、少しずつ発展させていくことが今後の目標だと教えてくれた。ウガンダでの経験と繋がりを、南牧村の地域の活力へと変えていく鰐淵さんの挑戦は、これからもまだまだ続く。

JOCV 経験者へのエール

南牧村村長 長谷川最定さん

やりたいことにチャレンジしたいという人にとって、お金は全てではないのかもしれませんが、でも、自立して生きていくために、稼ぎは必要です。金儲けしようと思って来たわけではないと思いますが、もっと金銭的に貪欲になっていいと思いますよ。一生懸命働くと、自由がなくなると考えているのかな（笑）。そんな心配をしなくて済むよう、村としても全面的にバックアップします。新たに挑戦したいことがあるなら、思い切って挑んでほしいです。





温故知新と幼き記憶

広島県大崎上島町長
おおくさかみよし

谷川 正芳
たに まさよし

私の生まれ育った大崎上島は、瀬戸内海のほぼ中央に位置しており、広島県の自治体の中で唯一、架橋で本土とつながっていない離島の町として近年脚光を浴びることが多くなってきました。

実際、15年ほど前に広島市内の金融機関で住所を銀行員が確認する際、「大崎上島ってどこにあるんですか」と聞かれていたのが、10年ほど前には「大崎上島って、ときどきテレビに登場していますよね」に変わり、一昨年あたりからは「よくテレビで見かけますね」と言われるようになってきました。

特にこの一年で、「きのえ温泉ホテル清風館が人気投票で『温泉総選挙絶景部門日本一』に選ばれたのはすごいですね」とか、「公立(県立)の中高一貫校・広島叡智学園の卒業一期の進路が世界ランキング10位以内の超難関海外大学への進学が目白押しですすごいですね」と称賛の声を多くいただくようになり、テレビ局からの取材も引く手あまたです。

これって何なんでしょうね。急に何かが変わったのでしょうか。それともだれか仕掛け人がいるのでしょうか。

この島は「観光ずれしていない島」と言われ、古くから海に囲まれた環境を生かした造船や海運業、そして温暖な気候を生かした柑橘の島として、モノづくりをベースとした地道で息の長い取組のおかげと思っています。

つまるところ、広島県内で唯一橋が架かっていない純粋な離島の町であることが、海に根差した産業文化を育てあげ、他にはない風土と伝統を紡いできたと思っています。

島の中でもその伝統を一番引き継ぐエピソードとして、現在は「海と島の歴史資料館」となっている北前船の廻船問屋の旧宅「大望月邸」での宴席の一コマ。今から約130年前、明治時代の中頃のことです。新政府による文明開化政策の一環で、それまで誰でも経験を積み乗り込めていた船員に免状を義務付けたこ

とに誘引します。その資格を取るために、何とか廻船問屋関係者で力をあわせて船員学校を作ろうという話が頓挫しかけた際、おした屋(大望月家)の大女将の機転がこの島を救ったという伝説。女将のことばで「せっかく近隣の皆の衆が出そろったのに、モテナシもなく帰してしまつてはおした屋(大望月家)の名折れ。皆さまにご馳走をふるまわせておくれ」と頼み込んだそう。それが縁起となって反対意見も消え、皆の総意で海員学校が設立され、現在の国立広島商船高等専門学校へと引き継がれているというお話であります。

その大崎上島の矜持として、私がまだ小学校低学年の頃の出来事も含めて今でも大切に心の支えとしていることが二つあります。それは、元尋常小学校校長であった祖父と、広島商船高等専門学校教官の父の知人から授かった何気ない一言です。祖父は、木造船の釣り船を櫓一本で操り、「流し釣り」として二次離

島の生野島の太古の昔から何一つ変わらない自然海浜の湾内を櫓一本で漕ぎつつ、祖父お手製の小さな釣り竿と鉛の重りと、自ら取ってきたエビの餌を付けて次々とチヌ(黒鯛)を釣り上げた時、「昔、この地域に爺さんと同じように自分で作った道具で集落家族みんなの食べ物を取っておった縄文人が住んでおったんだ」と教えてくれたこと。そして、「大崎上島東野村史」として明らかにされた村教育委員会の谷川潔(祖父)と生野島分校の福本清の二人の「キヨシ」による石器・土器調査の一端を教えてもらったのです。

また父は、旧制中学時代のあだ名は「ゼゴ」。イルカの仲間「スナメリ」を芸南(安芸国の南部)地域では「ゼゴンドウ(略してゼゴ)」と称しており、スナメリのように海の中を潜りまわっていたそうです。

若くして地元商船学校の教官となつてからも練習船の係留している棧橋で、生徒と潜り比べをして水深10メートルの底砂を手づかみして浮かんでくるなど、生徒と同じ目線の遊び心を持っていたそうです。

その父が商船高等専門学校退官後、スナメリ保護活動団体「芸南スナメリの会」を町役場内に設け、地元小中学生を対象に、スナメリ観察会を行っていた矢先、早世してしまい、その活動が休眠状態となりました。

随 想

しかし、父の大親友である人から「その遺志を継ぐのは息子のあんたしかおらん」と説得されました。その熱意にほだされ、一般社団法人Zegon（ゼゴン）を設立。大崎上島学で小学校4年生への環境教育を続けていることで、わが母校の町立東野小学校が環境教育で表彰される名誉に浴することになるまで定着してきています。

大崎上島で生まれ、育って、55歳にして大崎上島にUターンしたことは、母親の介護というきつかけがあったにしても、祖父・潔（きよし）と父・正（ただし）の何気ない矜持を息子として引き継いで、いつかはわが故郷に帰ってくるという、ごく自然な思いが引き継がれているからに他ならないからです。

この4月で町長に選ばれて2年が経過し、10年先の町政羅針盤である「大崎上島町第3次長期総合計画」を1年半かけて町民とともにまとめ上げてきたばかりです。

そのタイトルは「大崎上島町第3次長期総合計画」海景色の映えるまち／瀬戸内海から幸せつなく「豊かな自然と学びの島」を標榜し、町行政と町民が手と手を携えて地域創生の第一歩を踏み出そうとする強い意思表示をしたものです。

策定にあたって、最も重要な施策課題は、全国津々浦々共通の「人口

減少問題」であります。

分析を重ね現在人口6、700人が20年後には最低4、500人を維持する目標を立て、持続可能な基礎自治体の条件を明確に打ち出しました。

その原点は今現在の人口構成の分析で、外部からのUターンの人と全く同じ規模で、地元出身者のUターンがとても重要であることが明らかになりました。

そのため、具体的な施策としても、一つは、私の祖父から受け継いだ、大崎上島の矜持をもとに、旧3町に分かれていた旧町史をひとまとめに再編して、縄文時代からの大崎上島町を「温故知新」の精神のもと歴史から学んでいきたいと痛切に思っているところです。

もう一つは、私の父の思いを引き継ぎ、脱炭素による循環型社会モデルを明らかにするため、スナメリを象徴とした「海を守る」プロジェクトを推進し、ブルーカーボン先進地としての施策展開を考えていきたいと、関係企業等に働きかけているところです。

そして最も大切なことは、今、世界のさまざまな地域での紛争による殺戮が「正義」という一方的な原理主義によって、人間本来として大切にされてきた基本的人権思想が踏みこじられています。

人間本来の原点を取り戻すため、

今注目を浴びている古代ゲノム解析により紐解く試みが世界中で進んでいます。

遺伝子的なエビデンスを突き詰めていくと、ホモサピエンスとして今生き延びてきた人類は、全く同じ遺伝子ゲノムを持っていることが証明されたのです。地域によって太陽光（紫外線）から身を守ることで、熱帯地域と寒冷地域では、肌の色が白黒等で違っているにすぎず、宗教的に戦争のもとになっている人種で差別する理由は全くナンセンスだそうです。単に自分たちという一定の枠組みを作ること自分たちに都合の良い原理が横行しているにすぎないという結論が出ています。

私が学生の頃、「人類、皆兄弟！」というフレーズが一世を風靡していました。

日本列島に4万年前に南アフリカから人口増の意味で移動してきたホモサピエンスの先頭集団。つまり、移住パイオニアであったその人たちは、氷河期が終了したことで日本列島から移動する必要もなく、豊かな縄文文化にみられるようにすべての民が平等で殺し合いもなく、みんなが「一笑懸命」笑顔で助け合って数万年生きている文化風土を守ってきたという事実を、もう一度振り返る必要があると考えています。

この自然に恵まれ、人間の力の及ばないなにかの存在、東洋とか西

洋とかの区分を超えた「Something new（サムシング グレイト）」という人類共通の言葉でくくることのできる概念。縄文人たちこそが、すべての渡来人を受け入れて、共通の子孫を生み育ててきた日本人のルーツそのものであります。これまで人口減少による消滅可能性自治体と呼ばれ、そのレッテルが貼られてしまつ島しょ部や山間部の地域であればこそ、かつて日本人の先祖が生き生き幸せに自給自足という循環型社会の実践者たちであったことを再認識する必要があります。

産業革命という数百年続いてきた発展・消費型の経済から、まさに循環型社会の在り方そのものを先取りし、今後数百年どころか、数万年前を見据えた地球規模の新しい経済理念、つまり「経世済民」という経済本来の原点に回帰する理念を示していければと夢想しております。

思いとしては「温故知新」というキーワードを胸に、世に問いかけてみたいと考えているところです。

● 休刊のお知らせ ●

9月22日付の町村週報につきましては、休刊とさせていただきます。第3334号は9月29日付の発行となりますので、ご了承の程、よろしく願います。

ハロウィン ギャンボ

5億円

1等・前後賞合わせて5億円
1等3億円、前後賞各1億円

当せんの
チャンス
広がる

ハロウィン ギャンボミニ

5千万円

1等・前後賞合わせて5,000万円
1等3,000万円、前後賞各1,000万円

パソコンや
スマホで
ネット購入!



宝くじ公式サイト

<https://www.takarakuji-official.jp/>

9月19日(金) 同時発売

発売期間/9月19日(金)~10月19日(日)

抽せん日/10月28日(火) 各1枚300円

この宝くじの収益金は
市町村の明るいまちづくりや
環境対策、高齢化対策など
地域住民の福祉向上のため
に使われます。

2025年新市町村振興宝くじ

一般財団法人 全国市町村振興協会